史跡北代遺跡発掘調査概要

—ふるさと歴史の広場事業に伴う縄文中期集落の発掘調査—

1997

富山市教育委員会

史跡北代遺跡発掘調査概要

—ふるさと歴史の広場事業に伴う縄文中期集落の発掘調査—

1997

富山市教育委員会

例　言

1　本書は、富山市北代地内に所在する史跡北代遺跡発掘調査報告書である。
2　調査は、文化庁「ふるさと歴史の広場」整備事業に係るもので、歴史的建造物（縄文時代中期竪穴住居跡）復原整備のための資料を得る目的で実施したものである。
　調査にあたっては、平成８年度国庫補助金及び県費補助金の交付を受けた。
3　調査期間は、平成８年６月12日から平成８年８月１日まで現地発掘調査を行い、その後平成９年３月30日まで出土品整理及び報告書の作成を行った。
4　調査は、史跡北代遺跡環境整備委員会の各委員の指導を得ながら、富山市教育委員会主任学芸員古川知明が担当した。
5　調査にあたり、文化庁記念物課、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから指導を得た。
6　出土品整理にあたり、金沢医科大学の平口哲夫助教授に骨類鑑定の指導を得た。また、長野市立博物館の山口明氏、大迫縄文館の中村良幸氏、東和町ふるさと歴史資料館の高橋信一郎氏にタカラ貝形土製品についてご教示を得た。謝意を表します。
7　出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
8　本書の執筆は、古川が行った。遺物実測については安達志津が担当した。

凡　例

撹土

住居貼床

被熱礫

目　次

Ⅰ　史跡北代遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅱ　調査の経緯 …… 2
Ⅲ　発掘調査の成果 …… 3
Ⅳ　小結 …… 10
報告書抄録 …… 12
図版 …… 13

史跡北代遺跡環境整備委員会委員（平成９年３月現在）

委員長	**坂井誠一**	富山市文化財審議会会長
委　員	**河原純之**	千葉大学文学部教授
〃	**高瀬要一**	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部計測修景室長
〃	**浅川滋男**	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部遺構調査室主任研究官
〃	**守護　実**	富山県教育委員会文化課長
〃	**桃野真晃**	財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所所長
〃	**岸本雅敏**	富山県埋蔵文化財センター所長
〃	**小島俊彰**	富山市文化財審議会委員
〃	**大田清一**	地元・北代大畑遺跡公園促進協議会会長
〃	**坂口秀三**	長岡地区自治振興会長

Ⅰ　史跡北代遺跡の位置と環境

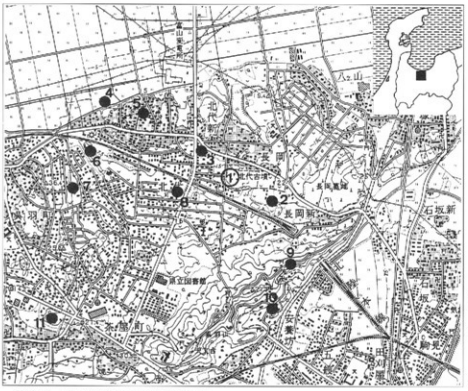
史跡北代遺跡は、富山市街地の西約３kmに連なる呉羽山丘陵の北麓に位置する。丘陵の北～北西麓は、標高20m前後で平坦な台地地形を発達させており、長岡丘陵と呼ばれている。この台地には丘陵側から幾筋もの開析谷が西走し、多くの舌状台地が形成される。

遺跡は長岡台地のほぼ中央、標高約17mの地点に所在する。遺跡の南側は丘陵から続く幅広い谷、また北側は小支谷の谷頭となっており、谷底ではいずれも湧水がみられる。

呉羽山丘陵一帯には、旧石器時代から近世まで200か所にものぼる遺跡が所在し、富山市域の約３分の１がここに集中する遺跡の宝庫である。縄文時代前期には、長岡台地北側の沖積地に蜆ヶ森貝塚など貝塚遺跡が形成されており、遺跡近辺にまで潟湖（古放生津潟）が広がっていたことがわかる。中期には、長岡丘陵上に集落遺跡が多く出現する。なかでも北代遺跡は拠点的な集落遺跡で、中葉から末までに約70棟以上の住居が確認されている。北代遺跡の北西約300mにある北代加茂下Ⅲ遺跡では、北代遺跡に先立つ中期前葉から中葉に小規模な集落が形成され、掘立柱建物跡が発見された。この掘立柱建物跡は、柱列が二重に巡る形態のもので、北陸では初の発見である。

弥生時代末から古墳時代初期には、呉羽山丘陵の北部に初期古墳群（杉坂古墳群）が営まれる。初期古墳群は呉羽山丘陵のほぼ全域に所在し、特に最南端の杉谷古墳群では四隅突出型方墳がみられ、古墳成立期に出雲地方との強い結びつきがあったことが伺える。

古代においては、北代遺跡で竪穴住居や鍛冶遺構など農村集落的側面の強い集落が営まれる一方、これに隣接する長岡杉林遺跡では、平安時代中期に祭堂と推定される建物が検出され、瓦塔・緑釉陶器（椀・火舎）・灰釉陶器（椀）など仏教的色彩の強い遺物が出土しており、一般的な開墾集落とは異なる拠点的集落と推定されている。



1　**史跡北代遺跡**
（縄文中期／集落）
2　長岡杉林遺跡
（古代／集落）
3　北代加茂下Ⅲ遺跡
（縄文中期／集落）
4　蜆ヶ森貝塚
（縄文前期／貝塚）
5　極楽寺廃寺
（中世／寺院）
6　北代中尾遺跡
（古代／集落）
7　小竹堤遺跡
（古代／集落）
8　呉羽富田町遺跡
（古代／集落）
9　杉坂古墳群
（古墳前期／古墳）
10　番神山横穴墓
（古墳後期／古墳）
11　呉羽モグラ池遺跡
（弥生後期／墓地）

注）（年代／性格）は主たるもの

第１図　史跡北代遺跡と周辺の遺跡

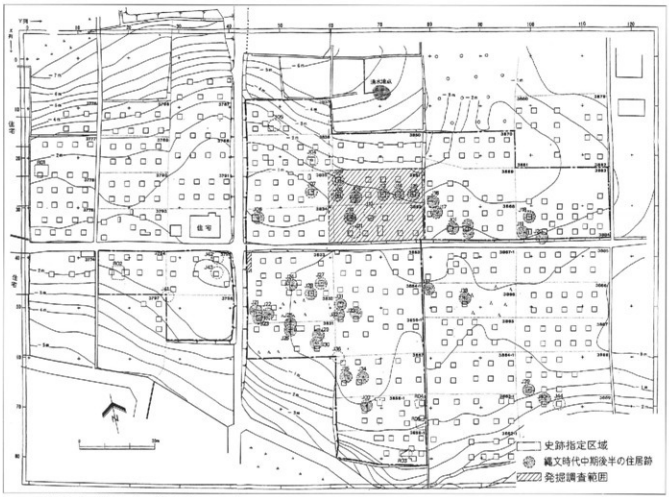
Ⅱ　調査の経緯

北代遺跡は、明治時代以来豊富な土器や石器が出土する遺跡として知られ、県内考古学会の草分けである早川荘作氏をはじめとして多くの研究者が訪れていた。過去に住宅開発が計画されるなどしたため県・市が試掘調査を行ったところ、東西280m南北200mの範囲に竪穴住居跡46棟が発見され、縄文時代中期の大集落遺跡であることが明らかになった。昭和59年１月４日には、北陸の縄文中期集落構造の解明できる貴重な遺跡として史跡指定を受け、昭和61年から平成６年まで指定地12,155㎡を公有化した。

平成７年度には指定地の北側に接する谷地の公有化に伴い、湧水地の状況確認のため試掘調査を実施した。調査の結果谷は最深部で一段深くなっており、その落ち込みの始まりは現地表面下2.2mで、それより下が縄文時代の包含層であることを確認したが、激しい湧水のため堆積状況や谷の基底部までの深度は未確認となった。

平成８年度には文化庁の史跡等活用特別事業「ふるさと歴史の広場」に採択され、国庫及び県費補助金を受けて平成10年度までに環境整備を完了する予定である。

今回の発掘調査は、ふるさと歴史の広場の主事業である「歴史的建造物の復原」にあたり、復原候補となる縄文時代中期後葉の竪穴住居跡の位置とその構造を確認するため、また、土層断面展示施設予定地の遺構確認のため実施したものである。



第２図　発掘調査区域図（1：1,500）

Ⅲ　発掘調査の成果

1　**概要**（第２図）　調査は、市道際の土層断面展示施設予定地約15㎡と、北側の谷に面する竪穴住居群のうち、最も遺構密度の高い中央部約800㎡を対象に実施した。

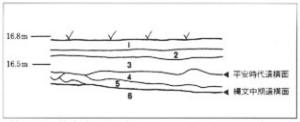
土層断面展示施設予定地では、縄文時代と古代の２つの遺構面が層位的に確認され、縄文時代は土坑が、古代は掘立柱建物の柱穴が確認された。

竪穴住居地区では、615㎡の住居跡確認調査ののち、竪穴住居跡２棟を発掘して住居内の構造を確認した。また確認調査の段階において、新たに縄文時代中期の掘立柱建物１棟を検出し、柱穴の一部について土層堆積状況を確認した。

調査では、旧石器時代から平安時代の土器・石器・土製品・動植物遺体が出土している。

2　**基本土層**（第３図）

基本土層は、市道に面する土層断面展示施設予定地の南部において確認した。



第３図　基本土層図（X＝1960　Y＝79248～79250）1:40

１層　表土層、２層　耕盤層、３層　黒褐色土で古代遺物包含層である。４層　暗褐色土、５層黄褐色漸移層で、４～５層が縄文時代遺物包含層である。６層は地山で、黄色火山灰土である。

土層は中央を横切る農道の南側では比較的よく残るが、北側では畑作により地山面を大きく削り込むところが多く、遺構の遺存状態は悪い。

3　**土層断面展示施設予定地の調査**（第４図）

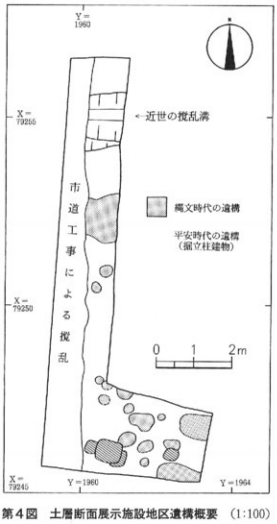
市道に沿った部分に土層断面の展示施設と通路等を設置する計画のため、土層及び遺構の遺存状況を確認した。土層は、基本土層の項で述べたとおり良好な状態で認められた。特に南側の保存状態が良い。

遺構は、縄文時代の土坑17基と平安時代の掘立柱建物柱穴４本の輪郭を確認した。

遺構検出面において、縄文時代の遺構は４層の暗褐色土、平安時代の遺構は３層の黒褐色土が埋土となっており、識別は容易である。

土　坑　直径15cmの円形の小型のものから長径１m以上の楕円形状のものまである。遺構確認面で縄文時代中期の土器を検出している。

掘立柱建物　方形の掘り方をもつ柱穴を確認した。３本の柱穴が重複していることから、３期の建物変遷が見られる。柱穴確認面から出土した土器には、口縁外面に沈線をもつ小型甕、胴部内面に扇状当具痕を施す長胴甕があり、平安時代（10世紀中頃）のものである。



第４図　土層断面展示施設地区遺構概要（1:100）

4　竪穴住居復原地区の調査

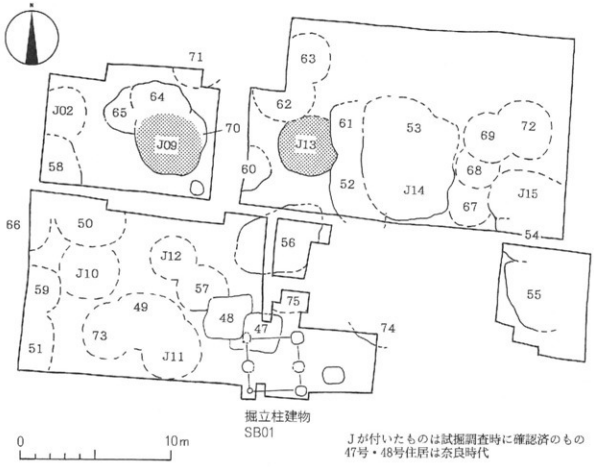
縄文時代中期の竪穴住居の復原は、北群集落と呼んでいる農道北側の竪穴住居跡群において、発掘調査で検出された住居を実物大で復原するという計画である。今回調査を行う範囲は、北群集落のほぼ中央部で、昭和55年度に発掘調査がなされた第１号竪穴住居跡の西側に設定した。調査予定範囲においては過去の試掘調査で９棟の竪穴住居跡が確認されていた。

調査は、第１に面的な確認を行って住居跡群の広がりをより詳細に確認すること、第２にその中から復原する竪穴住居を選び出すこと、第３にその竪穴住居を発掘し、復原に必要なデータを得ることを目的として行ったものである。

第１段階の面的な確認調査では、縄文中期の竪穴住居跡を新たに27棟検出したほか、同時期の掘立柱建物跡１棟を確認した。さらに奈良時代の竪穴住居跡２棟も確認した。

このうち、掘立柱建物の存在を確認したということは新しい知見であり、集落構造について再考する必要が生じた。

第２段階の調査を行う住居の選定にあたっては、検出面での輪郭が比較的明瞭であることと住居床面が確認できるものとし、第９号住居跡と第13号住居跡の２棟を選定した。いずれも試掘調査ですでに所在を確認していたものである。また掘立柱建物についても規模や性格を確認する必要から、全体規模及び各柱穴の状況を確認するための詳細調査を進めた。



第５図　住居配置図

第９号竪穴住居跡（第６図，図版４上）

調査区西部で確認した。試掘調査では床面の存在を確認している。

この住居跡は第70号竪穴住居跡の直上に構築されており、この埋土を利用して床面を構築していたため、各施設の検出は困難を要した。

規模・形状　北端部は撹乱を受けており、東西4.6m南北3.5mを検出した。直径4.6m前後の円形のプランが推定される。壁高は10cmである。

床面　黒褐色土混じりの黄色粘土を使った貼り床が、住居南西部から北部にかけて弧状に広がる。この床面は硬化しているが、炉跡周辺から東半部には硬化面は見られない。床面は西及び北側がわずかに低くなっている。

炉　中央部に石組炉がある（第６図上）。元は11個の円礫を用いて方形状に組んでいたことが推定されるが、被熱により脆弱になった砂岩礫２個を除き抜取られていた。砂岩礫は30～40cmの大きなものを使用している。他の抜取られたものは10～20cm程度の拳大の礫と推定される。北辺はこの大型砂岩礫と拳大の礫が二重に廻してあり、さらにその外側にもこれらを支えるような小振りの被熱した砂岩礫が埋込まれていた。炉底部には45×25cmの硬化した焼土面があり、厚さ６cmにわたり硬化している。炉の構築は、いったん床面から摺鉢状に深さ約20cm掘り凹めてから一度焼成し、15cm程度を埋戻している。これは炉構築の際に地中の水分を除去するためのものと推定される。その後は炉底の硬化部分の厚さが示すとおり長期間にわたり炉が使用されたと考えられる。

壁溝・主柱穴　南壁から西壁にかけて幅10～20cm深さ10cmの溝が廻る。この溝の中央には板壁跡とみられる幅６cmの黒色土が確認された。南西部では溝外側に接して磨製石斧の埋置がある。板壁の基部を外側から押さえる目的であったと思える。溝上には径15cm程度の小さな穴が３基程度あるのみで、他に柱穴が見られないことからこれらが主柱穴となる可能性があるが、柱構造の全体の配置等の把握はできなかった。

焼土　炉跡の東側に焼土ブロックが３か所認められた。これらは焼け方も弱く床面から数cm浮いていることから、土器などと一緒に廃棄された灰と考えることができる。

出入口　住居東半側と推定されるが、明確ではない。

遺物（図版８上）　住居中央部から400点の縄文土器・石器等が出土した。土器のほか土器破片を利用した土製円板が１点ある。石器類には蛇紋岩製磨製石斧、石鏃、小形の円礫状のヒスイ原石、滑石製垂飾品、石皿がある。また動物遺体では哺乳類と考えられる骨片がある。遺物はいずれも床面から2～3cm以上浮いており、住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

土器は、抱環双頭波状口縁と隆帯上を貝殻腹縁で刻むことに特徴づけられる中期後葉の串田新１式期を主体とするが、中期前葉から中期末の土器が断片的に含まれる。第70号住居埋土から出土した土器が中期中葉の古府式期のもので、炉内の土器は串田新１式期であることから、住居の存続時期は串田新１式期からこれをやや遡る時期とみておきたい。

第１３号竪穴住居跡（第７図，図版４下～５上）

調査区中央部で検出した。東側は第52・61号竪穴住居跡と重複し、北西側は第62号竪穴住居跡と接する。住居の掘込みは浅く、現代の畑作によりかなり撹乱を受けていたため、最終的に図上での復元作業により住居構造を把握した部分が多い。

規模・形状　南北4.2m東西4.0mを検出した。直径4.2m前後の不整円形プランになるものと推定される。床面積13.7㎡、壁高は約20cmである。

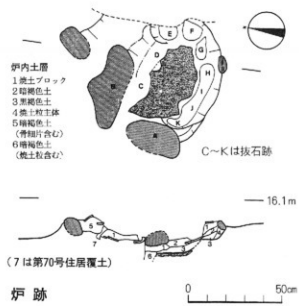
床面　壁面から10～60cmより内側全部に黄色粘土を硬く貼付けている。特に炉周辺で硬化が著しい。

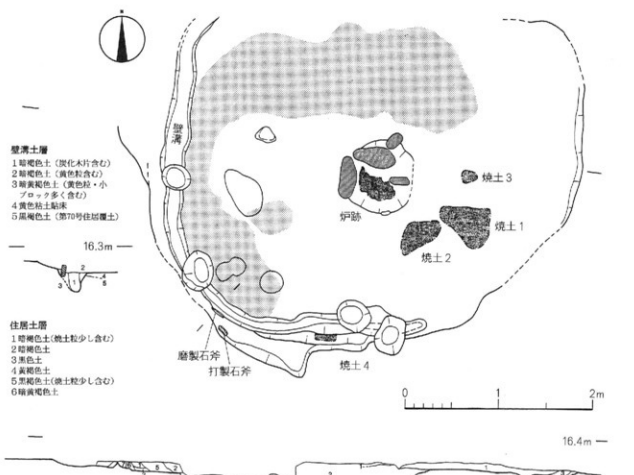
床面全体はほぼ平坦である。

炉　中央北東寄りに石組炉がある(第7図右上)。元は9個の礫を用いて方形に組んでいたことが推定されるが、1個を残し抜取られている。炉底部には50×35cmの硬化した焼土層があり、厚さ5cmにわたり硬化している。残されている礫は、当初の掘削面から5cm程度浮いて黒色土で整えられていることから、炉は改築されているものと考えられる。

主柱穴　7本主柱で、P13・P1・P7・P19・P3・P11・P6・P13がこれにあたる。柱穴の直径は15～20cmで、柱は直径10～15の細い材を用いていたと推定される。床面からの深さは13～28cmである。

焼土　炉の南から西側にかけて3か所の焼土ブロックが認められた。いずれも焼け方は弱く黒色土が混在していることから、炉の灰を廃棄した二次的なものと考えられる。なかでも焼土1は最も量が多く、床面直上に置かれた有孔鍔付土器に半ば覆い被さった状況であったことから、住居廃絶時または直後に廃棄されたものと考えることがで



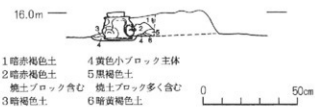


第6図　第9号竪穴住居跡(1:40)**と炉跡**(1:20)

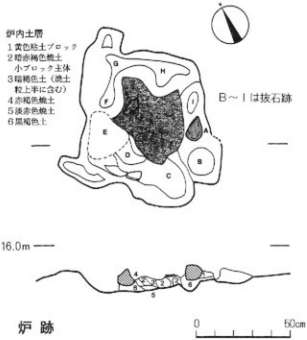
きる。

出入口　出入口とみられる明瞭な部分は分らない。西壁部において貼床が壁と最も近接し、壁高が低くなることから、ここを出入口とみることもできよう。

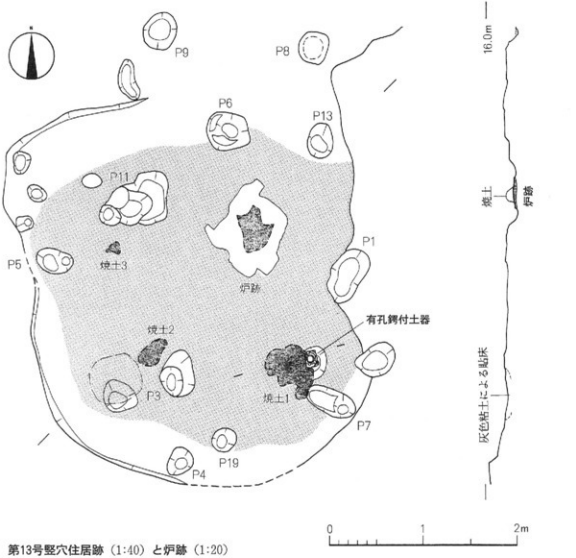
遺物（図版11中）　縄文土器・打製石斧・磨製石斧がある。隆帯上のヘラ状具による綾杉状刻みや搬入品とみられる隆起渦巻文があり、古串田新



有孔鍔付土器・焼土１断面（1:20）



炉跡

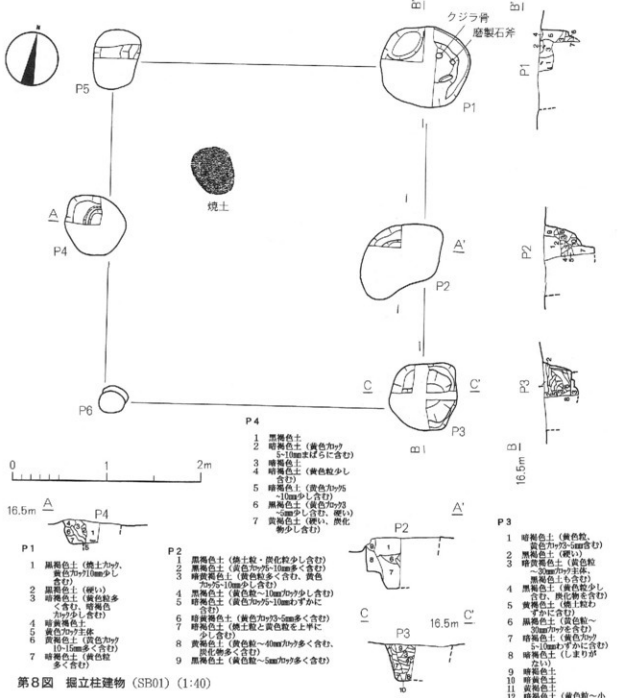


第７図　第13号竪穴住居跡（1:40）**と炉跡**（1:20）

式～串田新Ⅰ式期に属する。

有孔鍔付土器（第９図，図版８下）　住居南側の柱穴P7の内寄りに直径20cm深さ2.5cmの浅い穴を設け、約5mmの黒色土の堆積の上に置かれた状態で出土した。土器には焼土１が覆い被さっており、土器表面が被熱していることからこの焼土１は高温のまま土器の上に投棄されたものと考えられる。

土器は、高さ13.1cm口径9.6cm底径14.7cmで、口縁下の張り出した鍔上部に11の小孔がある。胴部には把手状の突起が４か所あり、渦巻状隆帯上は貝殻腹縁状工具により連続刺突がなされる。渦巻状隆帯をもつ突起のうち１つは、先端部に凹みを付け、一方に２つの小孔を穿っている。あたかも蛇が大きな口を開けている様子を模したもののようである。器面全体にはベンガラと推定される赤色顔料が



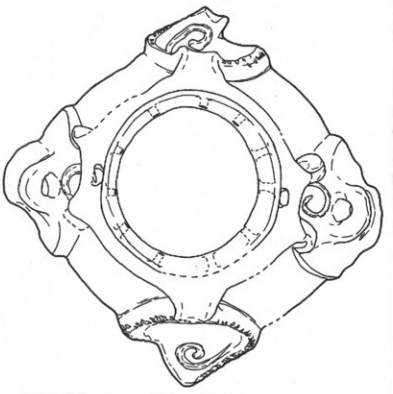
第８図　掘立柱建物（SB01）（1:40）

塗られている。内面は口縁部と底面中央部に赤彩がなされる。串田新Ⅰ式期の所産である。

第１４号竪穴住居跡

床面までの確認にとどめた住居で、埋土から大量の縄文土器・石器等を検出した。遺物量は約2,000点に上る。タカラ貝形土製品、２点のミニチュア土器の出土が特筆される。住居は推定6.0×4.0ｍの楕円形プランと推定されるが、最低３棟の住居が重複しており柱配列等は確認できなかった。石組炉はない。

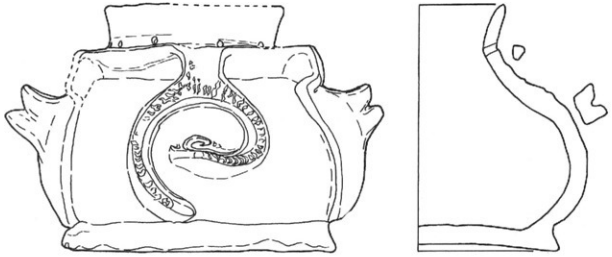
第14号住居の埋土を水洗し、多くの微細遺物を得た。石器製作の際に生ずる微細剥片は黒曜石、チャート・鉄石英・蛇紋岩・流紋岩・メノウ・ハリ質安山岩などがある。炭化物では、堅果類としてクルミ核（裂片）・クリ・トチノミがあり、ほかに種子類もみえる。魚類にはタイ科歯冠、アオザメ歯、ニシン類椎骨のほか椎骨がある。鳥類はサギ類と推定される上腕骨の遠位端部及び管骨がある。哺乳類の骨も多いが砕片のため特定できない。微細遺物の数量としてはクルミ核がもっとも多く、次いで哺乳類骨である。



掘立柱建物跡（第８図）

掘立柱建物跡が、調査区南端の農道際で確認された。

南北に長い長方形をした６本柱の建物跡で、長辺3.6ｍ×短辺3.4



第９図　第13号竪穴住居跡出土有孔鍔付土器（1/2）

m（外形）を測る。柱間の距離は長辺1.6～2.0mである。東側柱列の３本は、径60～70cmの掘り方をもち、径20～25cmの柱を埋めたとみられる。掘り方は 深さ35～40cmで、黄色土と黒色土を交互に埋めている部分も見られる。北東隅のＰ１の掘り方上部からは、ナガスクジラ類の椎骨とみられる大形骨片と磨製石斧が出土した。西側柱列のうち中央を除く２本は浅く小形で他の柱穴と形態がやや異なる。柱穴内からは縄文中期後葉の土器が出土しており、この時期の建物跡と考えられる。

北側の四本の柱穴に囲まれた内に、55×45cmの広がりをもった地床炉がある。これがこの建物に伴うものかどうかは調査の過程では明らかにできなかった。

Ⅳ 小 結

1 掘立柱建物と集落構造について

北代遺跡における中期後半の集落は、南北両側にある開析谷にそれぞれ面して二群の集落があり、各々は竪穴住居群によって構成されると考えられてきた。今回の調査により、二群の集落の中間部分に掘立柱建物跡が確認されたことから、集落の中央部が意識された二重構造の集落であると考えられる。

竪穴住居跡群は従来確認されていた46棟に新たに27棟を加え、計73棟が確認されたことになる。この密度から推測すれば総数は200棟を超えるものとなろう。その存続時期は主として中期中葉（古府式期）から中期末葉（前田式期）である。

掘立柱建物跡は、今回の調査では全体規模を把握できなかったことと、同様の建物が複数存在するかどうかを確認できなかった。特に掘立柱建物が群をなすかどうかの確認は本遺跡の集落構造を解明するためには重要な課題である。

縄文時代中期の掘立柱建物跡は、本遺跡の北西約200mにある北代加茂下Ⅲ遺跡（中期前葉）、小矢部市桜町遺跡（中期後葉～末）で確認されているほか、周辺地域では新潟県糸魚川市長者ヶ原遺跡（国史跡・中期中葉～後葉）、長野県富士見町居平遺跡（中期後半）、茅野市阿弥陀堂遺跡・立石遺跡（中期後半）、岐阜県関市塚原遺跡（中期後半）などがある。北代加茂下Ⅲ遺跡を除いてはいずれも拠点的な大集落遺跡であると認識されるが、概して北陸には少ない傾向にある。このようなことから掘立柱建物をもつ本遺跡は、北陸における特殊な大規模集落として特色づけられるといえる。

北代加茂下Ⅲ遺跡の建物は１棟のみが存在し、全体規模は確認されていないが8.1m以上×4.6mと大きく、柱は二重構造で柱数も19と多い。北代遺跡例とは規模・構造ともに大きく異なっていることからここに出自を求めることは困難であろう。

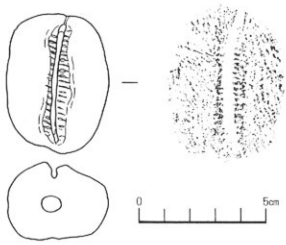
2 掘立柱建物柱穴出土のクジラ類骨について

掘立柱建物の柱穴Ｐ１から出土したクジラ類骨は、富山県氷見市朝日貝塚、石川県能都町真脇遺跡に次いで３例目の出土である。２遺跡はいずれも海岸部に位置し、多くのイルカ類やその他獣骨・魚骨などとともに発見されており、富山湾に展開した漁撈活動を直接裏付けている。一方北代遺跡は、当時遺跡の北側約1km付近まで広がっていたと推測される潟湖（古放生津潟）を介し海岸とは4.5kmの距離にあり、遺跡の立地も大きく異なる。また出土状況も断片的であることなどから、部分的に持ち込まれたものと考えられる。その目的としては、掘立柱建物建築の際の地鎮祭祀的な意味合いをもつものかもしれない。掘立柱建物の柱穴に特殊な遺物を埋納する例はあまり見られない。

3 タカラ貝形土製品について（第10図）

第14号竪穴住居跡の南壁部から出土した。5.5×4.0cmの楕円形で、厚さ3.1cmを測る。長軸中央を径6～7.5mmの孔が貫通している。表面中央に縦に深い沈線を入れ、その両側にヘラ状具先端で細かな刻

み目を付ける。表面及び左側面には絡状体圧痕が残る。右側面及び裏面には加飾はない。この有孔土製品は、中央の縦沈線と刻みの特徴からタカラ貝を模したものと考えられる。中央の沈線が緩やかにカーブを描くところは実に写実的といえる。類似した貝形土製品は、長野市旭町遺跡（縄文時代中期末）から貫通孔をもつ同規模（長さ5.8㎝）のものが1点出土しているほか、岩手県大迫町立石遺跡、東和町安俵六区遺跡（後期）で出土している。



第10図　タカラ貝形土製品（$\frac{2}{3}$）

タカラ貝の現生種でメダカラガイは日本海側では男鹿半島以南に広く分布するが、殻長は2㎝程度の小型種である。この土製品が大きさをも写実的に模倣したかどうか明らかではないが、もし大きさを模倣したとすれば殻長が5㎝に及ぶ中型種は熱帯系に属するもので、現生種ではヤクジマダカラガイ、ホシダカラガイ、コモンダカラガイ等がある。棲息域は日本海側では山口県以南、太平洋側では房総半島以南である。岩手県細浦A遺跡など東北地方の貝塚遺跡から出土するいくつかの中型品は房総半島以南で採捕できることからこの地域からの搬入品と考えられている。長野県栃原岩陰遺跡など内陸の山岳域で出土するメダカラガイ・カモンダカラガイ等の小型品も同様に考えられている。

本例を同様に理解すれば日本海側での熱帯種の最北端として位置付けられる。当然棲息域とは大きく隔たっており、それらの地域との交流を裏付けるものと考えられる。しかし一方土製品であるということは、それが何らかの形で使用されることが前提にあることから、富山湾の海岸部で採捕可能な小型種を模倣した際に実用可能な大きさに拡大して製品化した可能性も考えておく必要があろう。

参考文献

江坂輝彌　1983　『考古学シリーズ9　化石の知識　貝塚の貝』東京美術
小島俊彰　1974　「北陸の縄文時代中期の編年－戦後の研究史と現状－」『大境』第5号　富山考古学会
斎藤　隆　1981　「北代遺跡と吉田文俊」『富山市考古資料館報』№5
白井祥平　1997　『ものと人間の文化史83-Ⅰ　貝Ⅰ』法政大学出版局
栃木県立博物館　1988　『第23回企画展「祈りの原像」－縄文時代のまつりと道具－』
富山市教育委員会　1979　『北代遺跡試掘調査報告書』
富山市教育委員会　1980　『今市遺跡・北代遺跡』
富山市教育委員会　1981　『北代遺跡』
富山市教育委員会　1987　『長岡杉林遺跡』
長谷部言人　1942　「石器時代のタカラガヒ加工」『人類學雑誌』第57巻第9号
平口哲夫　1986　「富山湾沿岸における縄文時代のイルカ捕獲活動」『大境』第10号　富山考古学会
堀沢祐一　1996　「北代加茂下Ⅲ遺跡の縄文時代の掘立柱建物について」『富山市考古資料館報』№30
宮崎信之・平口哲夫　1986　「第2節　動物遺体」『石川県能都町真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団

報 告 書 抄 録

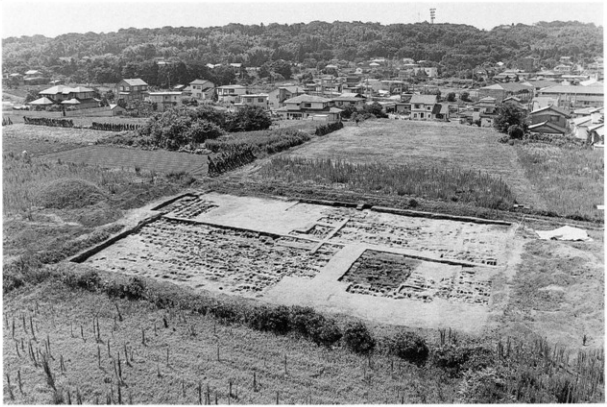
ふりがな	しせき　きただいいせき　はっくつちょうさがいよう
書　名	史跡北代遺跡発掘調査概要
副 書 名	ふるさと歴史の広場整備事業に伴う縄文中期集落の発掘調査
編 著 者 名	古川知明
編 集 機 関	富山市教育委員会
所 在 地	〒930　富山県富山市新桜町７番３８号　ＴＥＬ（０７６４）４３－２１３８
発行年月日	西暦　１９９７年３月３０日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
史跡北代遺跡	富山県富山市 北代字大畑	16201	125	36度 42分 10秒	137度 11分 20秒	19960612 ～19960801	630	史跡整備（ふるさと歴史の広場）事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡北代遺跡	集落跡	縄文（中期～晩期）	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑	縄文土器、土偶、石器（石鏃・磨製石斧・打製石斧・凹石・石皿など）、垂飾品、獣骨、魚骨、植物遺体	縄文時代中期の掘立柱建物跡の検出は、北代加茂下Ⅲ遺跡に次いで県内で２例目
		奈良～平安	掘立柱建物跡、竪穴住居跡	土師器、須恵器、土錘	

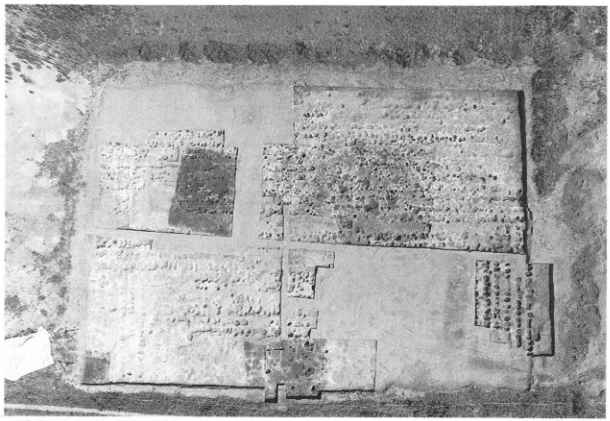
図版1

史跡北代遺跡近景（北西から）1992年３月撮影



発掘調査区全景（北から）

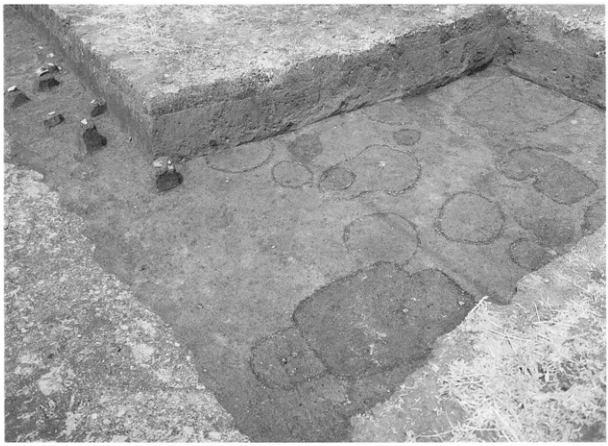
図版2



竪穴住居復原地区　発掘区全景

第９号竪穴住居跡（左）・第13号竪穴住居跡（右）検出状況

土層断面展示施設地区　土層堆積状況（南西から）



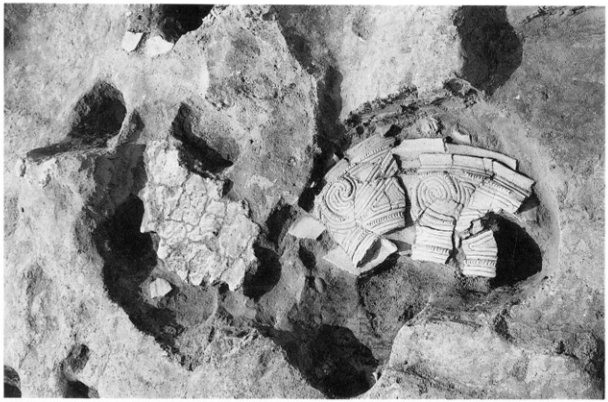
同　柱穴（平安時代）・土坑（縄文時代）検出状況

図版4

第9号竪穴住居跡　全景（南から）

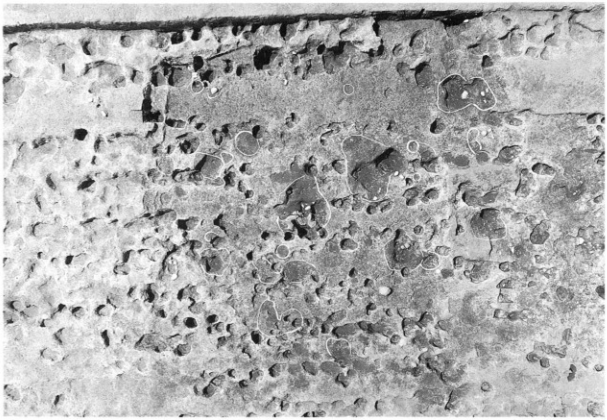
第13号竪穴住居跡　遺物出土状況（東から）

第13号竪穴住居跡　有孔鍔付土器・炉跡　検出状況



第70号竪穴住居跡　土器出土状況（第9号住居跡炉跡の下から出土）

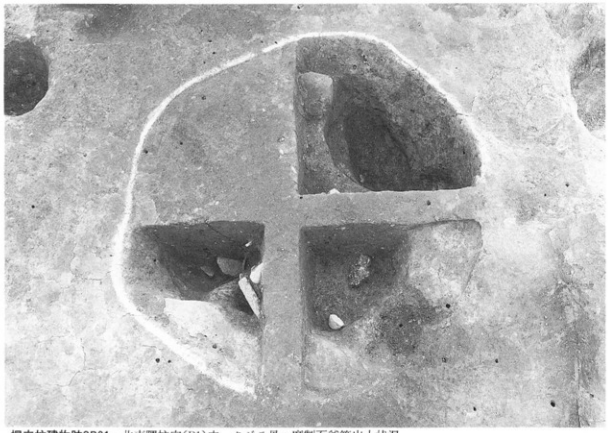
図版6



第14号竪穴住居跡　柱穴確認状況

同上　遺物出土状況

縄文時代中期掘立柱建物跡（SB01） 確認状況（南から）

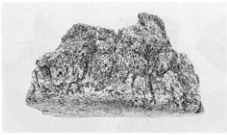


掘立柱建物跡SB01 北東隅柱穴(P1)内 クジラ骨・磨製石斧等出土状況

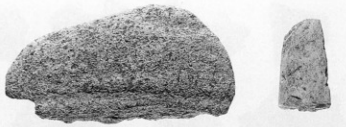
図版8

第９号竪穴住居跡出土　縄文土器・磨製石斧・石皿・垂飾品・ヒスイ原石・石鏃・骨片

第13号竪穴住居跡出土　有孔鍔付土器



クジラ類椎骨（掘立柱建物跡SB01 P1）



磨製石斧・板状石（掘立柱建物跡SB01 P1）

縄文土器（中期中葉）第70号住居跡

縄文土器（中期前葉）第62号住居跡

縄文土器（中期後葉）第57号住居跡

ミニチュア土器（中期）第14号住居跡

ナイフ型石器(包含層)

縄文土器（中期初頭～晩期）・土師器（平安時代）

図版10

縄文土器（中期後葉）

縄文土器（中期後葉～中期末）

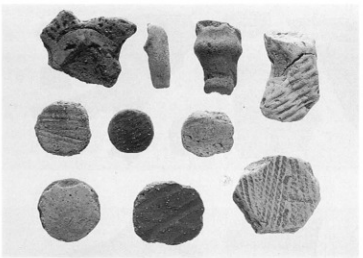
縄文土器（中期後葉～中期末）

縄文土器（中期後葉）

縄文土器（中期中葉～後葉）・磨製石斧・打製石斧　第13号住居跡

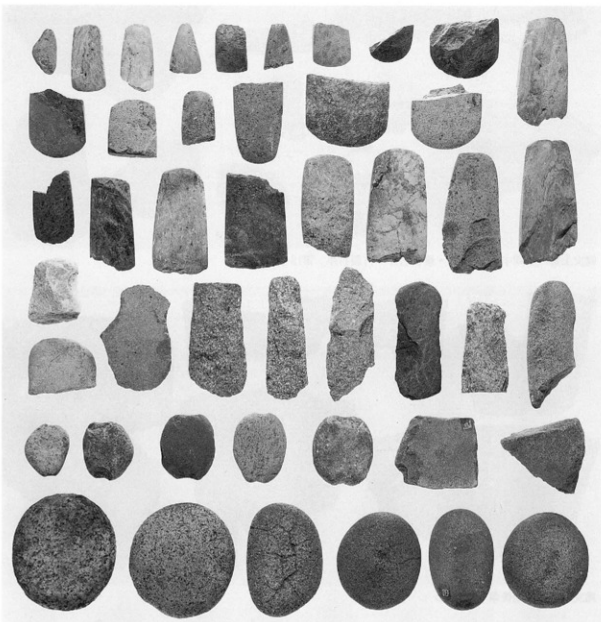
縄文土器（中期後葉～中期末）

図版12



土製品（土偶・土器片錘）

石器（石鏃・ヒスイ原石・大珠未成品）



石器（磨製石斧・打製石斧・石錘・石皿・磨石・凹石）

史跡北代遺跡発掘調査概要

－ふるさと歴史の広場事業に伴う縄文中期集落の発掘調査－

発　行　平成９(1997)年３月30日
編　集　富山市教育委員会（富山市新桜町7番38号）
TEL 0764-43-2138